

そ ら 宇 宙



コロナ禍にも負けずに 一步一步 歩みを進めて

済美教育センター 指導主事 今城 卓也

「大きくなったら警察官になりたいです。」と将来の夢を語り、観客の前で堂々と自分の好きなことや将来の夢を伝える小学校第一学年の児童の発表で「国際交流の集い」は幕があきました。

新型コロナウイルス感染症拡大にともない規模を縮小した形で、帰国児童及び外国人児童が日本語指導で学んだことを発表する「国際交流の集い」が杉並区立久我山会館で開催されました。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大にともなう臨時休業が4月から5月にかけて続き、その後の学校での生活はこれまでとは違う、新しいものへと変化してきました。今回参加した児童の皆さんだけでなく、区内の日本語指導を受けている全ての児童・生徒の皆さんが、この困難な局面に向き合い、一日でも早く日本の生活に慣れようと努力しています。マスクを着用し、距離をとって話すことが多く、日本語で会話する機会も昨年よりも少ない日常生活の中で、子どもたちは各学校においてこれまで一生懸命に日本語指導を受けて学んできました。その成果を、大きな舞台の上で発表するこのスピーチは、おそらくとても緊張したと思います。しかし、今まで学んできた日本語を使って自分の思いを伝えようと、真剣にスピーチをしました。生まれ育った国、文化、生活等、様々な違いがあっても、自分の思いや考えを会場の皆さんに日本語で伝え、聞いてもらうことで心と心がつながるよい機会になったと実感しました。

今年度は、前半の部は小学校低学年の帰国児童及び外国人児童によるスピーチ、後半の部は学校での日本語指導の様子のスライドショーから始まり、小学校高学年の帰国児童及び外国人児童によるスピーチでした。自分の好きなことや得意なこと、自分が生まれ育った国の学校と日本の学校との違いや、文化の違い等を発表しました。私たちが当たり前だと思っていることの中にも、海外からの視点で見ると不思議なことが多く、スピーチを聞く中で考えさせられることがたくさんありました。また、発表者の中には臨時休業の期間中に家で必死にひらがなや漢字の学習をしてきた児童や、学校生活の中で今ではほとんどの日本語が理解できるようになった児童もいました。本人の努力はもちろん、保護者や先生方、支えてくれた友達の影響も大きかったことでしょう。そんな様々な人たちの想いを受けたスピーチだからこそ強い感銘を受けました。

最後に、白石教育長より「これからは、色々な国の人や考えをもった人がお互いに協力をし合って創っていく、そんな社会です。ぜひ、学んだことをこれからの社会で力を発揮していただきたいと思います。」とお話がありました。これから益々多様化していく社会の中、今日の一人一人のスピーチのように、自分の思いを大切に、様々な経験を力に変えて伸びていただきたいと思います。

最後になりましたが、開催にあたり、各校の校長・副校長、担任の先生方には格別の御配慮と御支援を賜りました。ここに御礼申し上げます。



個別指導に感謝

杉並区立杉並第九小学校 教諭 岡島幸恵

2年生の4月に入学したAさん。日本生まれですが、インターナショナルスクールに通っていたため、日本語を話す環境はなく、自分の気持ちや考えを英語で表現してきました。またご両親がネパール人のため、現在でも家庭では英語とネパール語を併用して生活をしているそうです。そのため、本校入学に際し初めて日本語を学習することになりました。

編入後すぐは、日本語の指示を聞いても理解できないことが多くありました。担任やクラスメイトが身振り手振りで伝えたり、個別に手伝ったりする中で、段々と周りを見て行動できるようになりました。2～3か月経った頃には、「立ちましょ」「書きましょ」といった決められたフレーズは耳で聞いて理解し、行動できるようになりました。しかし、読み書きに関しては、繰り返し練習しても一人では日本語を発しようとはせず、ひらがなの読み書きも定着が見られませんでした。その影響で、国語や算数といった読み書きの必要な学習では習得に課題が残りました。

そこで、日本でこれから生活していくためには、日本語を習得することが何よりも必須だと本人と保護者に伝え、日本語指導を受けることになりました。普段、学級では個別指導が十分にできない中で、日本語指導では先生と一対一で学習することができました。担任が気付かなかったAさんの几帳面な一面を見取ってくださったり、なかなか日本語学習に前向きになれないAさんの状況を逐一報告してくださったりと、日本語指導の先生が担任と連携して対応して下さったことで、学級での指導に生かすことができました。

Aさんはまだ日本語で話をしようとしません。自己表現は英語を使いたがります。最初は「どうにかして日本語を」と焦る気持ちもありましたが、Aさんが日本語学習に前向きになれないのはなぜかという心の面で寄り添うことも大切だと今は感じられるようになりました。それは、日本語指導の先生が個別で指導して下さっている安心感があるからです。「日直の号令を日本語でかけていたよ」「ありがとうって日本語で言ってくれた」と、クラスメイトもAさんの日本語習得の力になってくれています。Aさんが「友達と話したい」「自分の気持ちを伝えたい」と日本語学習に前向きになれるように、担任として今後も学校生活での居場所作りをしていきたいと思います。



大きな支え

杉並区立井荻小学校 主任教諭 石塚 八千代

Bさんは5年生の12月にアメリカから編入してきました。当時は、日本語はある程度話せたものの、日本の小学校のシステムが初めてだったこともあり、様々な面で戸惑うことが多かったと思います。全員がランドセルを背負って学校に通うこと、歩いて登下校をすること、授業中の板書をノートに写すこと、給食のやり方が違うこと…。人懐こい性格のBさんは、日本の学校で驚いたことを素直に話してくれました。しかし、高学年の学習内容を理解することが難しかったり、友達とのコミュニケーション上で誤解が生じてしまったり、Bさんが学校生活を送る上で悩みを抱えていることが大変気がかりでした。

そのような中で、日本語指導の時間は、Bさんの心が開放され、ほっとできる貴重な時間でした。日本語指導がある日の朝は、「今日は日本語の勉強の日ですよ。」と自ら確認し、日本語指導の先生が教室まで迎えに来て下さると、嬉しそうに出かけていきました。自分にあったペースで日本語を学ぶことができ、日本語に確かな自信もついてきました。6年生の2学期には、「国際交流の集い」の参加をすすめていただき、より学習意欲も増してきました。本番前に校長先生やクラスの友達の前で堂々と発表もしました。アメリカの学校と日本の学校の違いなどについてしっかりと発表する姿は、自信に溢れた姿でした。発表の翌日、クラスメイトから「発表はどうだった？」と声をかけられると、「バッチリ！」と笑顔で応答した姿が印象的でした。

日本語指導のおかげで、授業中の取り組みも前向きな姿に変わっていきました。板書をきれいに写せた日は、自ら嬉しそうにノートを見せにきました。テストなどは日本語で書いてある問題文と一緒に読んでいくと、ほとんど自ら解答を導き出すことができました。授業内容をよく聞いていることが分かりました。クラスの中でも、自らよいと思うことを積極的に行動に移す姿が見られるようになりました。授業前にテキストを配ったり、教室移動の前に友達の手を整理したり、積極的にクラスに関わっていくことができるようになりました。

学校生活に前向きさが出てきたのは、本人の努力と日本語指導の先生のサポートのおかげだと実感しています。日本語指導だけでなく、文化の違いによる困り感にも寄り添い、丁寧に心をほどこいて下さったことで、明るく元気に学校生活を送れるようになってきたのだと思います。丁寧なご指導をありがとうございました。今後もBさんが日本語指導を通して学んだことを日々の生活に生かしていけるように声をかけ、自信をもたせていきたいです。

日本語訪問指導のすばらしさ

杉並区立堀之内小学校 教諭 仲田 優

Cさんは、昨年3月に韓国から日本にやってきました。新年度が始まる3月に編入する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止で休校中となったため、本校に通い始めたのは6月からでした。休校中にご両親と日本語の勉強をしていたとのことでしたが、友達とコミュニケーションをとる機会が少なかったこともあり、初めは日本語を聞き取ったり、話したりすることはほとんどできず、翻訳機を使いながら学校生活を送っていました。私もなるべくゆっくり話すように心がけ、翻訳機を使用したり、英語を使ったりしながらコミュニケーションをとっていました。しかし、早く日本語を習得したいという思いが強かったCさんは、覚えた言葉を積極的に使い、わからないことを質問してくる姿がとても印象的で、日本語習得のためにとてもがんばっていました。

7月から日本語訪問指導が始まりました。Cさんにとっては安心して学習できる場所だったようで、いつも嬉しそうに通っていました。日本語が分からず、文化の違いから友達とうまく遊べなかったことがありましたが、悔しい思いをしたことで、日本語訪問指導を始めてから驚くほどのスピードで読みも書きも習得していきました。そして、4か月ほどで翻訳機を使わずに友達とも十分コミュニケーションがとれるようになりました。

「国際交流の集い」に向けて、スピーチの練習に取り組み、本番前にクラスの友達に発表しました。今は、翻訳機なしで日本語の90%がわかること、将来日本の大学に行って歯医者さんになりたいことを堂々と発表し、クラスのみんなから大きな拍手をもらうことができました。そのときの彼女の笑顔は達成感で溢れていました。彼女の日本語を話せるようになりたいと思う気持ちとそれに向けての努力、そして日本語訪問指導での指導の成果が出た瞬間でした。

私自身、日本語がわからない児童を担当するのが初めてで、どのように支援しながら学習指導を行っていけばよいか不安でいっぱいでした。しかし、日本語指導の先生が毎回指導内容を記録してくださった連絡ノートのおかげで、学級での指導の有効な手立てにつながりました。ここまで指導してくださった先生に心より感謝を申し上げます。ご指導ありがとうございました。今後もCさんが充実した学校生活を送っていけるようにサポートを続けていきたいと思えます。



心のよりどころ

杉並区立天沼小学校 主任教諭 伊藤 友香

4年生の2学期から本校に通い始めたDさん。その当時は担任ではなく、クラブ活動で担当として関わることになりました。校庭でいろいろなスポーツに取り組むクラブでしたが、ルールを理解できなかつたり、チームの子とコミュニケーションをうまくとることができなかつたりして、周りの子が困って様子を見ていることがありました。Dさんは、持ち前の明るさで、笑顔でスポーツを楽しんでいる姿が印象的でした。また、中国の歌を楽しそうに歌っていたのも記憶に残っています。

5年生になり、Dさんの担任をすることになりました。日常生活にはほとんど困らない程度には日本語を話すことができるので、生活面で心配なことはあまりありませんでした。ただ、学習内容を理解できるのか、友達とのペア学習やグループ学習が成り立つのかなど、学習面で不安がありました。学習を始めてみると、やはり難しく感じる事が多く、とくに社会や理科などの用語が覚えられず、授業に参加していても分からないことばかりのようでした。

そのような状況の中で、今年度は週1時間にして日本語指導の学習を再開しました。Dさんは、日本語指導の時間を楽しみにしていて、わざと柱の陰などに隠れて先生に探してもらったり、日本語指導の部屋にあるものをいじったりと、先生の気を引くことばかりしていました。逆の意味の言葉を答える学習でもわざと間違えるなど、1対1で話を聞いてもらえる時間が嬉しくて仕方ないようでした。中国の友達との話や中国の学校のことも、日本語指導の先生には話していて、話を聞いてくれる存在が欲しいのだと実感しました。自分の言いたいことが伝わらないことは、学習が分からない以上にDさんにとってつらいことなのだと思います。

「国際交流の集い」でスピーチをすることになった際には、一緒に原稿を考えてくださったり、何度も練習に付き合ってくださいたりしたおかげで、自分の思いを日本語で伝えることができました。とても緊張したようで、手足が震えたことを後日話してくれました。この経験は、Dさんにとってかけがえのないものになると思います。

今後は、日本語指導の先生がしてくださっているように、Dさんの話を聞く時間を少しでも増やせればと思っています。日本語指導の先生には、日本語と共に大切なことを教えていただき、ありがとうございました。

Eさんとの出会いと学び

杉並区立富士見丘中学校 教諭 辻川 暢

Eさんは、2019年の5月に小学校へ編入し、2020年4月に本校へ入学したが、入学式は6月へと延期され、最初の2ヵ月は顔を合わせることもできなかった。しかし、休校期間中の課題をみて、本人の人柄がよく伝わってきた。課題の多くを日本語でこなしていた。6月によりやく顔を合わせると、Eさんは印象通りの活発な努力家であった。

授業では、クラスメイトがEさんのサポートを進んで行き、Eさんも自分からクラスメイトに声をかけ、疑問や悩みを解決していた。担任、そして授業者として私は、まだ漢字の読み書きが十分でないEさんの理解の助けになるよう、ルビふりや複雑な事柄については簡単な英文の解説を入れるなどしたが、何よりもEさん自身が努力によりどんどん実力を伸ばしていった。家庭では、長女として妹たちの世話や掃除などの家事をこなしつつ、自身の勉強に加えて妹の宿題を手伝うなど、日々努力を重ねていた。そして、国語の授業では短歌を作成し、日本語で行われたオリパラ講演会では、講演者と自身を重ねたうえで、講演者へのエールを日本語で書くなど目覚ましい成長がみられている。

しかし私はある出来事を通して、Eさんに対する見方を再確認しなければならないと感じた。それは総合の時間、自ら調べたことをクラスの前で発表する授業においてであった。前日の放課後に練習をし、当日も朝早く起きて一人で練習をしたようだ。本番では、聞き取りやすい日本語で、見事なスピーチを披露した。そして自席に戻ったEさんは、緊張から解放された安堵の表情で、涙を流していた。私はそれを見て、Eさんの努力を誉めるだけでなく、同時に抱える不安や悩みにどれだけ寄り添っていたかを改めて考えさせられた。

一方で日本語指導の先生は、きめ細かな日本語の指導だけでなく生徒の気持ちに寄り添い不安や悩みに対しても真摯に向き合った指導をしていただいている。日本語指導の前後では、私自身の不安などにも時間を割いてお話をさせていただくなど、日本語指導の先生にはEさんだけでなく私も含めて支えていただいているということを感じている。

これからも、Eさんは不安や悩みを抱えながらも自身の努力で成長を続けていくはずだ。そんなEさんを、日本語指導の先生の手助けもいただきながら、支えていきたいと考えている。



今年度の日本語訪問・補充指導について

済美教育センター国際理解教育担当

今年度は緊急事態宣言による4月から5月にかけての臨時休業、そしてその後の新型コロナ感染防止対策と、各学校におかれましてはたいへんな毎日であったことと思います。そうした中、日本語訪問・補充指導をすすめるにあたり、学習環境（教室）の準備やソーシャルディスタンスの確保等につきましては多大な御理解と御協力をいただきありがとうございました。また、今年度で33回目となりました「国際交流の集い」では、児童の参加、保護者・学校関係の方々に御来場いただき、無事に開催できましたことにも深く感謝申し上げます。

さて、左の表は今年度の訪問・補充指導実績です。また、下のグラフは最近6年間の推移です。今年度も、日本語の指導対象の子どもたちは様々な国から来日・帰国していることやその人数も、近年増加の傾向にあることが分かります。

現在、済美教育センター国際理解教育担当3名、外部講師15名の総勢18名が小・中学校からの要請を受け、日本語の訪問指導・補充指導にあたっています。子どもたちが、一日も早く日本語で自分の気持ちや考えを伝えることができるようになり、

学校や日本での生活を楽しみ、やがては出身国や滞在国との懸け橋となって活躍してくれることを願いながら、日々日本語適応指導に務めていきます。

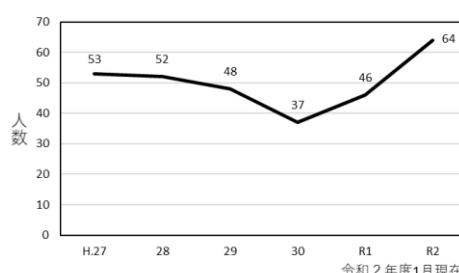
訪問・補充指導実績

学年別内訳

出身国 滞在国等	合計	小学校						中学校		
		1	2	3	4	5	6	1	2	3
ネパール	34	9	2	2	2	3	6	5	3	2
中国	12	2		1	2	3		2	1	1
アメリカ	6	2	1	1	1		1			
フィリピン	4	3	1							
韓国	3	2			1					
イタリア	1					1				
台湾	1	1								
ブラジル	1			1						
ベトナム	1		1							
ミャンマー	1				1					
合計	64									

令和2年度1月現在

最近6年間の訪問・補充指導人数の推移



令和2年度1月現在